

## 玉井先生を送る言葉

野村和宏

玉井健先生、2002年に本学に着任してからの神戸外大での17年間のお勤め、お疲れさまでした。私と所属学科は違っても同じ大学院英語教育学専攻担当のグループであり、また研究室も同じフロアであったことから、本当に毎日のように顔を合わせていました。

玉井先生の主な研究テーマは英語教育学におけるリスニング指導法開発、教師教育および授業実践研究でした。研究分野として余り注目されてこなかったリスニング指導に認知心理学的知見を持ち込んだシャドーイングの研究は、『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』として出版され、この分野での先駆的研究として高く評価されています。これは英語学習法としてのシャドーイングが広く認知されるに至る理論的基盤を確立したもので、その後のシャドーイング研究や指導法に関わる論文や発表で多く引用されていることから、玉井先生のこの研究の重要性は明らかです。この研究成果を一般の英語学習者でも応用できるように学習書も多く出版してこられました。

このリスニング指導法はICCコースの授業で生かされており、帰国子女を始めとする強者揃いのICCコース学生もうならせていました。また国際関係学科の専攻英語の一つである講読の授業は、現代の世界情勢から最新の話題を選び、学生に考えさせた後で、最後にはクラスでディベートを体験させるというもので、授業は学生の熱気にあふれていました。実はディベートは玉井先生がかつて神戸市立葺合高校で教えていた際にも取り組んでおられたことですが、実はその当時、まだ日本では高校の英語授業の中で生徒にディベートをさせることは非常に珍しかったのです。

本学の大学院英語教育学専攻の枠組みは、時期を同じく退職される村田先生や既に退職された阿部先生、他大学に移られた南先生、現在副学長を務めておられる山口先生らと共に玉井先生も一緒に起草にあられたものです。現職教員が働き続けながら学ぶことのできる4学期制、週末を利用したリカレント教育大学院という点と共に、内省に基づく教師の変化と成長というま

さにリフレクティブ・プラクティスの精神が評価され、プログラムが始まってからわずか2年で文部科学省から特色GPの認定を受けました。この院のプログラムの精神的支柱というべきものが玉井先生の担当する英語教育指導分析の授業でした。授業を担当するわれわれ教員メンバーもリフレクティブ・プラクティスに関する研修を受けるために、特色GPの支援により2007年と2008年にはアメリカ、バーモント州ブラトロボロにあるTESOLと教師教育の名門SIT (School for International Training Graduate Institute) の夏季集中研修に参加する機会を得ました。このSITこそ、玉井先生がリフレクティブ・プラクティスを学ばれたところだったのです。新緑の木々に囲まれてたたずむSITのキャンパスの中で、時を忘れて自らを見つめ直す機会を得たことは、何よりの体験となりました。

玉井先生は、実践理論としてのリフレクティブ・プラクティスを大学院リカレント教育において応用的に実践を行い、さらに質的研究法としての理論基盤を整えることに注力してこられました。その独創的な研究成果は既に多くの論文や著作として発表され、学界でも大いに注目されています。リフレクティブ・プラクティスとは何か、また何をどのようにふり返ればよいか、など、理論的背景、実践方法、研究手法を紹介し、教師教育におけるリフレクティブ・プラクティスに焦点をあて、教員養成段階の学生と現職教師のふり返りの実践方法、さらに教師教育に従事している著者のリフレクティブ・プラクティスとの関わりも述べた最新刊『リフレクティブ・プラクティス入門』も退職に合わせて上梓されました。

院の授業で、優しい顔をしながら禅問答のように問いかけを繰り返す授業の中身は厳しいものとなっています。課題に対しても最初から評価のコメントを書くのではなく、まずはWEBドキュメント上で他の履修学生と共有させて院生同士でコメントを書いた後で、さらなる問いを書き足すといった具合で、決して安易にまとめをしようとはしませんでした。この問いに対して踏み込んだ内省が見られない院生に対しては容赦なくREDOを与えることになりました。この英語教育学専攻において、玉井教授の指導の下で内省に基づく教師としての振り返りの大切さを学び、変化と成長を目指して研鑽した修了生たちが、現場の学校に戻りそれぞれの学校の中核を担う教員として多く活躍していることからその指導の成果と英語教育界への貢献が伺えます。

自然体の授業は学生に心地よいラーニングコミュニティを提供していました。私自身、外大に着任することが決まり授業計画を考えていた際に玉井先生に外大学生について尋ねたことを覚えています。それなら実際に自分の授業を見に来てみたらと即答があり、英語教育法の授業を見学させていただ

きました。そのお陰で外大での授業や学生の具体的なイメージをつかむことができました。また神戸市や兵庫県の小中校の先生方に対して 2011 年度から毎年行っている英語教育オープンクラスにおいても、何度も授業をオープンにしてもらいました。見学に来られた先生方も授業に参加して評価のルーブリックを作成する作業を一緒に行うなど、教室で起こっていることに意味を持たせる玉井流がここでも見られました。このように玉井先生の授業には必ず問いかけがあります。研究室で行っていたゼミでも学生に答えさせながらホワイトボードにマッピングしていき、最後には全体の見事なパースペクティブが現れるのです。英語教育法で学生が模擬授業をした後もその授業について教師側からすぐに評価するのではなく、学生役だった他の学生から授業者に対してまず質問をさせていたのが印象的です。

私は自宅が近かったためよく車に乗せて送ってもらいました。最近では濃紺の BMW に乗り換えられましたが、長らくは黄色と白のミニクーパーでした。その愛らしい車の中で英語教育のことだけでなく、趣味の話もよく一緒にしました。教員の立場を離れて話すときはお互いに「玉井さん」あるいは「玉ちゃん」「野村さん」あるいは「ノムちゃん」と呼び合う仲の良い友人です。玉井さんのお気に入りの CD の一つはキース・ジャレットのケルンコンサートで、ピアノの繊細な表情と奏者の息遣い、会場の空気感を再生するためには、1 ビットデジタルアンプにスピーカーはマイクロピュア製のスーパートゥーターがついたものでなければといったこだわりよう。陶芸をたしなみ自ら茶碗を作陶する文脈で掛け軸や骨董の名品も収集、研究室には何気ない木切れをオブジェとして飾り、いただくお茶やコーヒーも素敵な湯飲みやカップで出てくる次第。コーヒーの豆はお気に入りの店のマスターによる焙煎で、豆を挽くのはセラミック刃の手回しのミルと徹底していました。確かに奥行きと深みのある味わいでした。年賀状の趣のある文面は随筆家としての玉井さんの顔を見せてくれるもので、私の毎年の年頭の楽しみの一つになっています。

退職後は高知で新設の大学に勤められるとのことですが、大学院英語学専攻の英語教育指導分析については、容易に担当できる指導者が見つからない、いわゆる余人をもって代えがたし状態であり、この新学期からもしばらくは引き続き週末に授業でお世話になります。玉井先生に教わったリフレクティブ・プラクティスの精神を教育においても人生においても引き続き実践していきたいと思っています。玉井先生、ありがとうございました。